九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Long-term outcomes and prognostic factors in 78 Japanese patients with advanced pancreatic neuroendocrine neoplasms: a single-center retrospective study

李, 倫學

https://hdl.handle.net/2324/1654732

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

（別紙様式２）

氏　　名	李　倫學
論　文　名	Long-term outcomes and prognostic factors in 78 Japanese patients with advanced pancreatic neuroendocrine neoplasms: a single-center retrospective study
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　中村　雅史 副　査　　九州大学　　教授　　中西　洋一 副　査　　九州大学　　教授　　吉田　素文

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本邦における膵神経内分泌腫瘍(PNEN)の患者数は徐々に増加しているが，その長期予後と予後予測因子に関しては明らかにされていない．そこで本研究では，肝臓膵臓胆道内科で診療した切除不能PNEN 78例の臨床情報をもとに，長期予後と予後予測因子についてretrospectiveに検討した．低悪性度に分類されるPNETと高悪性度に分類されるPNEC(NET G3)の全生存期間は，83.7ヶ月と9.1ヶ月であった．PNETにおけるKi-67 indexのcut-off値に関して，2%では生存期間に有意差は認めなかったが，10%を超えた症例ではそれ以下の症例に対して有意に生存期間が短かった（ハザード比 9.95，$p<0.01$）．また，単変量解析，多変量解析ともに，前述したKi-67 >10%に加え，分子標的薬登場前に治療された症例と，骨転移を有する症例では生存期間が有意に短かった。また、PNEC13例をKi-67 >55%で２群に分けると55%以上の群は統計的に有意に予後が不良であった。以上の結果は、分子標的治療がPNEN患者の予後改善に重要な役割を果たしていること、およびPNECと分類される１群もヘテロな集団である可能性が明らかとなった。

以上の成績は切除不能PNETの治療法の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。